韓国の世界史教科書にみるベトナム戦争の記述

大　平　晃　久・宇田川　み　さ

Ⅰ　日韓両国の歴史認識－問題の所在－

日本と大韓民国（以下、「韓国」と略す）は文化的に近い関係にあり、政治・経済上も多くの利益を共有する、地域及び国際社会における重要なパートナーである。にもかかわらず、両国民の間には歴史認識をめぐる容易に解決しがたい懸隔があることもまた事実である。本稿は、日韓両国の歴史認識の相違の一端を探ることを目的として、韓国の世界史教科書－中学校社会2教科書と高等学校世界史教科書－においてベトナム戦争がいかに記述されているか、日本との比較の視点を加えつつ、分析を行なおうとするものである。

日韓両国の間の歴史教科書問題を概観しておきたい。日本の高等学校日本史教科書に対する検定が国際問題化した1982年以降、日本の歴史教科書の記述に対しては韓国、中国など周辺諸国から厳しい視線が注がれるようになった。こうした関係は「新しい歴史教科書をつくる会」が執筆の中心となった扶桑社版中学校歴史教科書の一部の地域・学校における採択や、中学校の地理や公民の教科書における竹島の記述が問題化した今日まで続いている。こうした韓国から日本の教科書に対する視線の一方で、日本から韓国の教科書を批判・検討することも、中には政治的な主張が目立つ著作も多いが、徐々に行なわれるようになった[(1)]。また両国の研究者の間では、キリスト教学校教育同盟関西地区国際交流委員会[(2)]や日中韓3国共通歴史教材委員会[(3)]といった民間団体、あるいは2002年に政府間の合意で発足した日韓歴史共同研究委員会[(4)]など、歴史認識の懸隔を埋めるための共同研究が行なわれていることに注目したい。

学校教育、とりわけ歴史教育がナショナルアイデンティティを育成する制度であり、アンダーソンが提示するところ[(5)]の「想像の共同体」たる国民国家の形成と維持に大きな役割を果たしていることは論を待たない[(6)]。しかし、上で見たように国際化、グローバル化の進展の中で、日本では学校教育の場で教えられる国民史が内と外から揺らいでいる。韓国においてそれはどう観察できるか検討することも本稿の課題の一つである。

韓国の歴史教科書を日本と比較しつつ論じる研究は先にみたとおり少なくない。しかし、それらは日本語の翻訳もある中学校・高等学校の国史教科書のみを対象としたものが大半である。ベトナム戦争の記述については、国史教科書のみを取り上げて韓国でベトナム戦争が学校では教えられていないと指摘されることがある。逆に韓国近・現代史教科書ではベトナム戦争が詳しく扱われていることも紹介されているが[(7)]、世界史教科書におけるベトナム戦争の記述を対象として日本と比較した研究は管見の限りない。

ベトナム戦争は冷戦体制の大きな転換点となった事件という意味でまさに世界史的事件であり、日韓両国も深く関与し、大きな影響を受けた。とりわけ韓国はアメリカに追随してベトナムに派兵したという過去を持つ。韓国における歴史認識と日本におけるそれとの違いをみるうえで格好のテーマといえるだろう。

自国史の教科書ではなく世界史教科書を対象とするのは、そうした検討が等閑に付されてきたということもあるが、積極的には次のように説明できる。すなわち、世界史教科書においては理論的には全世界の歴史が扱われるわけであるが、そこには当然そのネイション独自の偏りが生じるであろうし、また自国を世界史にどう位置づけるかに、自国史（ここでは韓国史）の叙述には十分に現れない歴史認識のありようが

読み取れると考えられよう。世界史という枠組においてベトナム戦争がいかに語られるか検討することは、韓国における歴史認識をみるうえで、従来の研究とは違った価値を持つものであると考える。

本稿で主に分析の対象とするのは韓国の中学校・高等学校における世界史教科書であり、以下では韓国の歴史教育課程を概観したうえで[8]本稿の研究方法を示しておきたい。

韓国では初等学校6年の社会科に歴史の内容が含まれ、社会1教科書において韓国通史が扱われる。それに続く中学校社会科においては、社会1（日本の地理、世界史にあたる内容）、社会2（同じく世界史、公民にあたる内容）、社会3（同じく公民、地理にあたる内容）、国史の4冊の教科書が使用される。これら社会科教科書は第6次教育課程（1992年改定）までいずれも国定（「第1種教科書」）であり、それぞれ1種類の教科書が使われてきたが、1997年告示の現行課程である第7次教育課程から、国史を除く社会1～3教科書は検定教科書（「第2種教科書」）に移行した。なお、教科書の採択は高等学校を含め学校単位で行なわれている。第7次教育課程における中学校社会の標準授業時間数は、中学1、2年が週3時間、3年が週4時間である。

高等学校のカリキュラムをみると、現行の第7次教育課程では、国史が1年の必修科目（標準授業時間数週2時間）になっている。歴史関係ではそのほかに、2・3年次の選択科目として世界史（標準授業時間数週4時間）と韓国近・現代史（標準授業時間数週4時間）がある[9]。このうち韓国近・現代史は第7次教育課程で新設された科目で、その位置づけや内容は韓国内でも非常に論議を呼んできた。またこの科目の新設に伴い、必修の国史は前近代史までを主に扱う科目に再編された。教科書の発行形態をみると、中学校同様に国史は国定で教科書は1種類のみだが、世界史と韓国近・現代史は検定制で多くの種類の教科書が用いられている。

現行の教育課程に基づいて発行された韓国の中学校・高等学校の世界史教科書のうち、本研究では8社9種類の中学校社会2教科書、3社3種類の高等学校世界史教科書を入手した[10]。以下では、これらの教科書におけるベトナム戦争に関する部分を訳出し、文章そのままを示す（Ⅱ章）。そして①ベトナム戦争、そして韓国の派兵がどのように記述されているか、②冷戦構造全体の中でベトナム戦争がどう位置づけられているかを検討する（Ⅲ章）。その際、韓国の旧版教科書や中学校、高等学校の国史教科書における記述、また日本の教科書の記述を比較のため適宜参照する[11]。

Ⅱ　多様な教科書の記述

9種類の中学校社会2教科書、3種類の高等学校世界史教科書をひとまず、A. ベトナム戦争が全く扱われていない、B. ベトナム戦争は何らかの形で扱われているが、韓国の参戦には触れられていない、C. 韓国の参戦について述べられている　の3つに分類してみよう。ベトナム戦争の扱いは個々の教科書によって、出版社によって相当異なることが分かる。

A
（中学校）　①教学社版a[12]
　　②同和社版

B
（中学校）　③高麗出版版
　　④教学社版b
　　⑤金星出版社版
　　⑥ティディムドゥル版
　　⑦中央教育振興研究所版
（高等学校）⑪教学社版
　　⑫金星出版社版
　　⑬志学社版

C
（中学校）　⑧成地文化社版
　　⑨志学社版

具体的な教科書の内容を以下に示す[13]。なお、以下では、各教科書を上に示した番号で呼ぶことにする。

③ 高麗出版版

「4 冷戦体制の成立」「援助資料 冷戦時代の分断国家群」

(南北朝鮮、東西ドイツ、両中国を概述して)

フランスの植民地で、太平洋戦争時、日本によって占領されたベトナムは、日本の敗北とともに共産主義指導者のホー・チ・ミンの主導のもとで独立を宣言したが、フランスはアメリカと結んで介入し、南北が分断された(1954年)。

特に、わが国とベトナムは分断以後冷戦体制化で民族同士がお互いに争う不幸を経験した。…

(写真の説明) フランスとアメリカの介入と冷戦体制の対立状態の中で、ベトナム民族は30年以上長い長い戦争の苦痛を経験したのだった。(124頁)

「冷戦時代から和解の時代へ」

・・・アメリカが莫大な資金と大規模な兵力を動員したベトナム戦争で敗北したことで、アメリカの権威が揺るがされ、・・・(126頁)

④ 教学社版b

「4 新たに展開する戦後の秩序」「東アジアどのような変化が現れたか?」

日本は…アメリカの援助と6.25戦争、ベトナム戦争を契機に、経済発展を遂げた。(110頁)

「第2次世界大戦後、独立を取り戻した国々は?」

…東南アジアではインドシナ半島が共産化したが、…(110頁)

⑤ 金星出版社版

「2 冷戦体制の形成と変化」「活動 ヤルタからマルタまで」

(資料2 ピンポンが開けた鉄のカーテン)

…(アメリカは) 1975年にベトナムから撤兵した。(119頁)

「3 世界秩序の新たな展開」「アジア・アフリカの変化」「東南アジアの発展」

…ベトナムは独立後、南部の民主主義政権、北部の共産政権によって分断されたが、共産化した(1975年)。…(121頁)

⑥ ティディムドゥル版

「わが民族を分断させた冷戦」「探求活動」

(地図上に) 東西ドイツ分断、キューバ危機、6.25戦争、ベトナム戦争(123頁)

「植民地の束縛から逃れ独立へ—アジア、アフリカ」

・・・一方、ベトナムはフランスと戦い独立を勝ち取り、アメリカとの長年の戦争で勝利して国土の統一を成し遂げた(ベトナム戦争)・・・(124頁)

「冷戦解体と新しい国際秩序の形成」

・・・アメリカもまたヨーロッパ統合運動の展開、日本の経済的成長、ベトナム戦争敗北などでもはやイデオロギー的西側陣営の盟主の役割を果たすことが難しくなった。(126頁)

⑦ 中央教育振興研究所版

「3 冷戦体制の成立」「インドと東南アジア、宗教とイデオロギーの葛藤によって分裂する」

フランスの支配から抜け出たベトナムは、イデオロギー的対立のために南北に分裂し、南側には民主主義政権が成立、北側にはホー・チ・ミンの共産政権が成立した。続いてベトナム戦争が起こり、長年の戦争の末に、介入したアメリカが撤退したため、結局ベトナムは社会主義体制で統一した(1974年)。…

(写真の説明) ベトナム戦争 ベトナムの民族内のイデオロギー的対立にアメリカが介入したため、ベトナム戦争が始まった。(120頁)

「4 国際秩序の新たな展開」「世界は多極化し平和共存、和解の時代が開かれる」

…日本の経済成長、ベトナム戦争におけるアメリカの敗北、中国とソ連の共産主義宗主国紛争は、このような(米ソの相対的地位の低下)流れをより一層促進した。(122頁)

⑧ 成地文化社版

「3 冷戦体制」「冷戦体制が緩み平和共存の道を模索した」

・・・アメリカはソ連及び中国との関係を改善し、ベトナム戦争から撤退した。・・・(120頁)

「4 世界秩序の新たな展開」「東アジアの新たな秩序—分断、冷戦体制下、敗戦国日本は経済的発展を遂げた」

…(日本は) 6.25戦争と後のベトナム戦争

を契機として経済的跳躍を遂げた。(121 頁)
「インドは独立で分裂し、東南アジアの国家も独立した」
…フランス植民地だったベトナムも独立したが南北に分裂した。そして北側共産政権の挑発でベトナム戦争が起こり、アメリカとわが国などが参戦したが、共産主義者たちが勝利し、社会主義国家に統一された。(122 頁)
「探究活動　ベトナム戦争が起こった理由」
　第 2 次世界大戦の終わった後、共産党のホー・チ・ミンはベトナム民主共和国を建国した。同時にフランスは植民地を取り戻すため、南側にベトナム共和国を建てた。この後、アメリカが南側を支援すると、対立するベトナム民族解放戦線が結成され、ホー・チ・ミンはこれを積極的に支援した。アメリカの北ベトナム爆撃が始まり、戦争はなお拡大した。
1　ベトナム戦争が起こった理由は何か、整理してみよう。
2　アメリカとわが国がベトナム戦争に参戦した理由を調べよう。(122 頁)

⑨　志学社版
「4　新たな世界秩序の樹立」「インドと東南アジアにおいて多くの国が独立する」
…前後して、ベトナムは共産党が中心となって民主共和国の樹立を宣言した。しかし、南側に自由主義政府が建てられ、ベトナムは南北に分断された。この後、北ベトナムが戦争に勝利し、ベトナムは共産政権によって統一された（1975 年)。…（118 頁)
「資料ボックス　ベトナム戦争」
　北ベトナムは独立に干渉したフランスの侵入を撃退し、ジュネーブ協定を結んで統一政府を建てようとした。しかし南側に自由主義政府ができて南北に分断された。そのため、南側の共産主義者たちは「ベトコン」を組織し、また北ベトナムの支援を受けて南側政府を攻撃した。
　アメリカは 1961 年から南ベトナムの共産化を止めさせるために戦争に介入し、その後、だんだんと正規軍の派遣を拡大した。派遣された地上軍は 50 万を超えることになり、連日、北ベトナムに対して猛烈な爆撃を実行した。アメリカの要請に従い、わが国、タイ、オーストラリアなどが参戦したが、軍事的に勝利できなかった。
　アメリカは国内の反戦運動が世界の世論に支えられ、パリ協定を結んでベトナムから撤退した。この後、共産勢力がサイゴンを陥落させたため、戦争は幕を下ろした。
資料　ベトナム戦争に要したアメリカの費用(略)　(118 頁)
「1　共産圏の没落と資本主義世界の拡大」「冷戦時代から平和共存の時代に進む」
…一方、1960 年代以後、アメリカもヨーロッパ共同体の結成、第 3 世界の台頭、日本の経済的成長、ベトナム戦争の失敗などによって、国際的影響力を弱めた。…（122 頁)

⑪　教学社版
「1　冷戦体制の展開と変化」「(2) 冷戦体制はなぜ生まれたのか？」
　1950 年代、6.25 戦争、ベトナム戦争を見ながら、アメリカでは共産主義の膨張を心配する中でマッカーシズムが起こった。・・・(340 頁)
「(3) 第 3 世界の登場と緊張緩和」「冷戦体制の変化―両極化から多極化へ」
…彼（ド・ゴール大統領）は東欧圏と接しながら、アメリカのベトナム政策を非難した。(342 頁)

⑫　金星出版社版
「3　戦後のアジア・アフリカ」「アジア・アフリカの新たな誕生」
　東南アジアの国家も戦後に独立した。ベトナムは戦後、南北に分断され、1975 年に北側のベトナム民主共和国の主導で統一した。…（293 頁)
「冷戦を拒否したアジア・アフリカの選択」「考察の展開　冷戦体制で犠牲となったベトナム」
　第 2 次世界大戦後、ベトナムはフランスからの独立を宣言してベトナム民主共和国を樹立した。9 年以上にわたるフランスとの戦争の後に独立を達成したベトナムは、すぐに近づいた冷戦のために国土が二分された。東南アジアの共産化を未然に防ぐという名分で、

アメリカは民衆の支持基盤の弱い南ベトナム政権を支援し、そのために中国、ソ連は共産主義政権である北ベトナムと南ベトナム民族解放戦線を支援したことによって、ベトナムは東西両陣営が角逐する場となった。

南ベトナムでは、アメリカが撤退し、統一国　家のベトナム社会主義共和国ができた1975年まで15年の間、120万人以上が死亡し、国土は焦土化した。さらに現在まで多く残留した枯葉剤の後遺症に悩まされている。(グラフ3枚＝省略)(293頁)

⑬　志学社版

「1　冷戦体制の展開と変化」「緊張の緩和」

アメリカのニクソン大統領は、ニクソン・ドクトリンを発表した後、ベトナムから米軍を撤退させ、…(325頁)

「3　20世紀の社会と文化」「探究活動　現代社会における大衆文化の役割」

1964年、アメリカのベトナム戦争への介入の規模がとてつもなく拡大すると、反戦運動と反抗の波にアメリカ全体が包まれた。そして、それと同じ雰囲気の中で、物質主義的で実利主義的な既存の体制に対する抵抗の動きが現れた。…(336頁)

Ⅲ　教科書の中のベトナム戦争と韓国

(1) 韓国のベトナム参戦をめぐる記述

以上列挙した中学校・高等学校世界史教科書のベトナム戦争に関する記述について、まず戦争そのもの、また韓国の参戦についての記述を検討したい。

韓国のベトナム参戦については、中学校社会2教科書では9冊中7冊、高等学校世界史教科書にいたっては3冊中全3冊で全く触れられていない。しかもそのうち中学校の2冊の教科書はベトナム戦争自体を全く記述していないのである[14]。そして、このようなベトナム戦争の影の薄さは中学校・高等学校の国史教科書にもみることができる。先述したように高等学校国史は現行教育課程では前近代史中心となり、近現代史は極めて簡略化された結果、以前の教科書には存在したベトナム戦争への言及は消えている[15]。一方、中学校国史教科書においては次のような極めて貧弱な記述があるのみである。

朴正熙政府は民主友邦との結びつきを強化する一方、中立国と外交関係を樹立するため努力するなど、積極的な外交を展開した。そうして長い間宿題となっていた日本との関係を改善して韓日協定を締結し、ベトナムに国軍を派兵した[16]。

韓国の歴史教育にしばしば向けられる、韓国のベトナム参戦が教えられていないという批判は、国史だけでなく世界史にも、さらに歴史教育全体についてあてはまるといえるだろう。

ここで韓国軍のベトナム派兵についてまとめておこう。朴正熙政権のもと、韓国は1964年9月に最初の海軍医療部隊を派遣したのを皮切りに、1965年10月には陸戦部隊である猛虎師団1万数千、続いて青竜、白馬両師団を次々に派兵して本格的に参戦し、1973年3月23日に完全撤収するまでに延べ31万人以上をベトナムに投入した。ベトナムの韓国軍兵力はピーク時には5万人以上に達し、他のアメリカ同盟国―オーストラリア、タイ、ニュージーランド及びフィリピン―が工兵や砲兵といった部隊しか派兵しなかったのに対し、韓国は唯一、大量の戦闘部隊を送り込み、約5千人の戦死者と今日まで続く枯葉剤後遺症患者を生んだ。韓国のベトナム参戦には派兵の見返りの援助とベトナム特需とがあったことが知られる[17]。韓国軍戦闘部隊の派兵条件に関する米韓間の協定により、韓国政府は派兵規模に応じた補助金を得た。また、ベトナム特需すなわち対米輸出の増加はその後の韓国経済の輸出志向型工業化の基盤となったと評価されている。このような功罪両面で語られる韓国のベトナム参戦は、ケネディ大統領が提唱した「自由主義世界援助計画(モア・フラッグズ more flags 計画)」に従ったものであると従来は考えられてきたが、近年、朴正熙大統領から早い段階で派兵が打診されていたことが知られるようになった[18]。

このように韓国にとってあまりに大きな歴史

的事件であるはずのベトナム派兵であるが、韓国における戦後の関心は概して低かった。木宮正史によれば、朴政権を評価する立場からはベトナム全土の共産化を許したベトナム戦争は失敗であり忘れ去ろうとされた一方で、朴政権を批判する側は韓国がベトナム戦争で利益を得たことを過小評価してきたという[19]。これと重なる見解は韓洪九によっても示されている[20]。

このようにみると、韓国では自らのネイションにとってふさわしくない記憶であるベトナム参戦は忘却され、そうした記述は抑制されている、といってしまいたくなる。しかし、ことはそう単純ではない。もう少し前章に訳出した教科書の記述内容を詳しくみよう。

ベトナム戦争をめぐる記述を並べてみていくと、⑧成地文化社版の「北側共産政権の挑発でベトナム戦争が起こり、アメリカとわが国などが参戦したが、共産主義者たちが勝利し、社会主義国家に統一された」という、明らかに反共色の濃い記述をするものがある。その一方で、⑥ティディムドゥル版の「ベトナムはフランスと戦い独立を勝ち取り、アメリカとの長年の戦争で勝利して国土の統一を成し遂げた」という記述や、③高麗出版版、⑨志学社版、⑫金星出版社版の各教科書の記述は、植民地解放の文脈でベトナム戦争を叙述している。これらはベトナム戦争について互いに対立する2種類の語りであるといってよいだろう。

そして、以前の教科書では反共色が支配的であった。現行教育課程の1つ前の第6次教育課程における中学校社会2教科書、中学校国史教科書、高等学校国史教科書（いずれも国定教科書）では次のような記述をしている。

中学校社会2

フランスの支配から抜け出たベトナムも、イデオロギー対立のために南北に分かれることになった。南側には民主主義政権ができ、北側にはホー・チ・ミンの共産政権ができた。南側政府に対する共産ゲリラの攻撃によってベトナム戦争が起こり、これを助けるためにアメリカと韓国を始めとした連合国が参戦した。この戦争は共産主義者たちの勝利に終わった（1975年）[21]。

中学校国史

朴正熙政権は…共産侵略を受けているベトナムを支援するために国軍を派遣した[22]。

高等学校国史

アメリカはいわゆるニクソン・ドクトリンを宣言し、ベトナムからアメリカ軍を撤収させ、その後ベトナムは共産化されてしまった[23]。

上で確認した⑧成地文化社版教科書の記述は、いわばこれら一時代前の教科書記述の残滓であるといえるだろう。さらにみるなら、南ベトナムを「民主主義（政権）」と表現する⑤金星出版社版と⑦中央教育振興研究所版の教科書もこの流れを引き継いでいると考えられる。

韓国の公的な歴史観では、ベトナムの韓国軍は国威宣揚を果たした輝かしい「反共十字軍」であった[24]。しかし、1992年に韓国はベトナムと国交を樹立、1990年代の終わり頃から韓国ではベトナムにおける韓国軍の戦争犯罪が知られるようになり、反省すべき過去としてとらえられるようになった[25]。

こうした韓国社会の変化の中、従来の公的な歴史観が耐えられなくなり、あわせて中学校社会2教科書の検定制移行も手伝って、反植民地的な文脈でベトナム戦争を記述する教科書が登場し、従来型の反共的記述の教科書と混在しているといえる。ベトナムの植民地解放肯定と韓国のベトナム参戦肯定は両立しがたいために参戦は記述されないのであろう。

高等学校の新しい科目である韓国近・現代史については、ベトナムにおける韓国軍の加害記述を含んだ金星出版社版の教科書が出版されて50％を超える採択率をあげていること、またベトナムの記述を含むこの教科書の示す歴史観が議論を呼んでいることが紹介されている[26]。ここまで検討した中学校・高等学校の世界史教科書にはこうした例はなかった。ただし、ベトナム参戦を記述する2つの教科書をみると、⑨志学社版教科書では韓国の派兵を「アメリカの要請に従い、わが国、タイ、オーストラリアなどが参戦した」と非自発的なものとして記述し

ている（上述したようにこれは事実とはいえない）。⑧成地文化社版は反共色の強い本文記述ながら、「探究活動」として「アメリカとわが国がベトナム戦争に参戦した理由を調べよう」という項目を設定しており、参戦の最終的な評価を生徒・教師に示すことを留保しているかのようである。すなわち、これら2冊の教科書にはベトナム参戦に対する評価が覆ったことが微妙な形で表れていると考えられる。ベトナム参戦を記述しないものも含め、韓国の中学校・高等学校の世界史教科書は現在の韓国における言論状況を反映したものになっていることがみてとれるのである。

(2) 冷戦体制とベトナム戦争の記述

次に検討するのは、冷戦体制とベトナム戦争の関係についての記述である。

ベトナム戦争は上述したように植民地解放という文脈で説明されることも多いが、冷戦下の対立であることは大半の教科書で明記されている。それに対し、韓国の中学校・高等学校世界史教科書で冷戦下の出来事（「熱い戦争」）としてもっとも重視されているのは6.25戦争（朝鮮戦争）であり、1つの教科書（②同和社版）を除いて記述されている[27]。韓国が6.25戦争、すなわち冷戦体制下の犠牲者であるという歴史認識は、③高麗出版版教科書の、自国とベトナムを冷戦の犠牲者として並べる記述に如実に現れていよう。いうまでもなく、韓国のベトナム参戦に留意するならこうした記述は生じえないはずであり、自国史を冷戦体制という文脈で語る叙述のスタイルが、ベトナム参戦の忘却につながっていることは明らかだと思われる。

もう一つ、冷戦とベトナム戦争に関して指摘できるのは、韓国の中学校・高等学校世界史教科書ではアメリカがベトナムで勝利できないまま撤退したことの影響があまり記述されないということである。むろん、ベトナム撤退がアメリカの威信の低下、世界の多極化をもたらしたという、国際的な影響については多くの教科書が記述している。それに加え、日本の高等学校世界史教科書ではほぼ例外なく、また中学校歴史教科書も多くがアメリカ国内における影響を記述している。

> …ジョンソン大統領は1964年、黒人差別撤廃をめざす公民権法を成立させ、「偉大な社会」計画の下に差別と貧困の解消をめざす社会政策を推進した。しかし対外的には、ベトナムへの軍事介入を拡大した。60年代後半から、ベトナム戦争の泥沼化と損害の増加によって、国内で学生を中心とする反戦運動が激化した。また公民権運動の指導者キング牧師が1968年に暗殺されるなど、黒人運動をめぐる対立も深刻になり、社会の亀裂があらわになった。69年に大統領に就任した共和党のニクソンは、ベトナムからアメリカ軍を撤退させたが、ウォーターゲート事件で74年に辞任した。60年代後半からの混乱によって、豊かで安定した社会、民主的な国家運営という合衆国のイメージは、大きく損なわれた[28]。

ところが、韓国の世界史教科書ではこうした記述はほとんどない。⑨志学社版のアメリカ国内の反戦運動についての記述、⑬志学社版の反戦運動と社会運動への影響の記述がある程度で、内容もごく簡単である。

当時も現在もきわめて重要な同盟国であるアメリカにいわば無関心ともいえる教科書記述になっているのは、当時の韓国では海外からの情報が限られ、独裁的な政権の下でベトナム反戦の動きも起こりえなかったことが理由として指摘できよう。それに対して、日本ではメディアを通してアメリカの社会、文化の動向が直接波及していたこと、またそのこととも関連するが国内で反戦運動が盛んだったことを指摘できる。単に先進国としてアメリカ社会と同じ時代を共有したというだけでなく、ベトナム戦争、とりわけ解放戦線への強い思い入れなども加わった[29]、世代的に独特なアメリカ観が指摘できよう。日本におけるベトナム戦争の語りはこうした時代状況を反映したものであり、韓国との歴史認識の差異となって現れているといえそうである。

(3) 記述の不備と制度的問題

最後に補足として、韓国の中学校・高等学校世界史教科書それ自体がどのような特徴をもつか、日本の教科書と比較しておきたい。

まず、ここまででも述べてきたことだが、韓国の教科書は日本以上に教科書間の違いが大きい。ただし、内容には差が大きい一方で、教科書の章や節の区分や名称は教科書でほとんど差がない。日本とは教科書検定基準に違いがあることを予想させる。

そして、それだけ教科書ごとに差が大きく執筆側の自由度が高い中では、明らかな記述の不備を指摘しなければならないものも含まれている。本稿ではベトナム戦争関連部分を検討しただけであるが、自国が戦場となった6.25戦争を冷戦に関連させて取り上げない②同和社版、ベトナム戦争を日本の経済発展との関連でしか記述していない④教学社版b、ベトナム撤退のみ言及した⑤金星出版社版、⑬志学社版は歴史の叙述として明らかな欠陥であるといわざるをえない。また、ベトナム統一年の誤り（⑦中央教育振興研究所版）、アメリカの撤退した年の誤り（⑨志学社版）、ベトナム戦争とマッカーシズムを同時期とする誤り（⑪教学社版）といった細かい部分でのミスも目に付く。

韓国の検定教科書は、販売部数に関係なく韓国検定教科書協会加入出版社で利益を同様に分け合う「利益金均分制」が実施されているため、教科書の質の向上に各社が力を入れないという批判がある[30]。こうした日本の教科書では考えられないような記述の不備が、このような制度を背景として生じているのであれば、いささか問題であるといわざるをえないだろう。

Ⅳ　おわりに

本稿では韓国の中学校社会2教科書、高等学校世界史教科書においてベトナム戦争がいかに記述されているか、若干の検討を行なった。まず、韓国のベトナム派兵がこれらの教科書でほとんど記述されていないことを指摘し、それはかつての反共的な記述から国内・国際情勢の変化によって変化を余儀なくされたために起こったものであり、現行の教科書には現在の韓国における言論状況が読み取れることを論じた。次に、自国を冷戦の犠牲者とみる歴史認識がベトナム派兵の無視につながっている可能性を指摘し、続けてベトナム戦争がアメリカ社会に与えた影響の記述が極めて少ない点に当時の韓国の文化・社会が反映されていることを指摘した。

ベトナム戦争の記述に関して、現行の韓国の教科書には大きな問題点があることは間違いない。日本の教科書の洗練された客観的記述はその点で評価すべきであると思う。とはいえ、ベトナム戦争について「アメリカは実弾を売り、日本はモノを売り、韓国は血を売った」[31]と揶揄的に語られる日本の関与について、大半の教科書は何も語っていない。ことさら日本の歴史教科書をあげつらう訳ではないが、どんな歴史叙述も何らかの偏りから逃れ得ないことを改めて認識すべきであろう。日韓両国の歴史教科書が平和と共存のための方向で改善され、正しい歴史認識のもとに友好協力と共存共栄のための鏡となることを心から願わずにはいられない。

〔付記〕本稿は宇田川が2006年1月に東海女子大学文学部に提出した卒業論文の一部を、大平が大幅に加筆・修正したものである。なお、教学社版高等学校世界史教科書の訳出は宇田川の友人であるイ・ジョンスク氏にお願いした。記して感謝申し上げる。

注

(1) 韓国に対して対抗的な立場をとらない著作としては、武藤 淳・岩田 功吉「韓国・国定『国史』教科書の検討」歴史評論 414、1984、45-56 頁、武藤 淳「韓国高等学校世界史教科書にみる日本史叙述について」史苑 43-2、1984、95-103 頁、君島和彦『教科書の思想－日本と韓国の近代現史』すずさわ書店、1996、鄭在貞『韓国と日本－歴史教育の思想』すずさわ書店、1998、坂井俊樹『現代韓国における歴史教育の成立と葛藤』御茶の水書房、2003、中村　哲『東アジアの歴史教科書はどう書かれているか－日・中・韓・台の歴史教科書の比較から』日本評論社、2004、青野正明「韓国『国史』教科書に見る近代日本」日本史研究 497、2004、4-12 頁などがあげられる。政治的に韓国を批判する立場を露骨に示すものとしては、勝岡寛治『韓国・中国「歴史教科書」を徹底批判する－歪曲された対日関係史』小学館文庫、2001、鳥海　靖『日・中・韓・露　歴史教科書はこんなに違う』扶桑社、2005、八木 秀次「日本人の知らない韓国『独立戦争』史観」正論 404、2005、118-131 頁など。

(2) キリスト教学校教育同盟関西地区国際交流委員会編『〈日韓合本版〉日韓の歴史教科書を読み直す－新しい相互理解を求めて』神戸学生青年センター出版部、2000。

(3) 日中韓 3 国共通歴史教材委員会編『未来をひらく歴史－東アジア 3 国の近現代史』高文研、2005。

(4) 扶桑社版中学校歴史教科書の記述をめぐり日韓関係が悪化したことをきっかけに、2001 年 10 月にソウルで行われた小泉純一郎首相と金大中韓国大統領（いずれも当時）の首脳会談で「日韓歴史共同研究」が合意され、翌年、双方の専門家によって構成される「日韓歴史共同研究委員会」が発足し、古代史、中近世史、近現代史の時代別に分科会が設けられた。

(5) アンダーソン、B.（白石さや・白石　隆訳）『増補　想像の共同体』NTT 出版、1997(原著 1991)、22-26 頁。

(6) 日本の研究者による代表的な著作として、桜井啓子『革命イランの教科書メディア』岩波書店、1999、岡本智周『国民史の変貌』日本評論社、2001 など。

(7) (1) 辛珠柏（水野直樹訳）「韓国の新しい教科書『韓国近・現代史』の特徴と問題点」日本史研究 497、2004、13-23 頁。(2) 水野直樹「(第 3 回多民族共生人権啓発セミナー講演）日本の植民地支配をふりかえる」2004 年 11 月 19 日、http://www.taminzoku.com/news/kouen/kou0502_mizuno.html、2006 年 10 月 31 日検索。

(8) 斉藤里美編『韓国の教科書を読む』明石書店、2003 が参考になる。

(9) 履修率について正確なデータは入手できなかったが、韓国近・現代史は 2095 校中の 1415 校で開講されている（「時時刻刻『北朝鮮に甘く自国には否定的』教科書論争韓国版」朝日新聞 2004 年 10 月 6 日付)。世界史も履修率は低くないようである。

(10) 中学校社会 2 についてはほとんど全種類、高等学校世界史は 7 種類程度発行されているうちの 3 種である。一部を購入したほかは主として財団法人教科書研究センター教科書図書館（東京都江東区）にて閲覧することができた。

(11) 日本において教科書はいうまでもなく文部科学省の検定のもとで出版されている。高等学校では地理歴史科の科目のうち、世界史 B または世界史 A が必修とされ、日本史 B、日本史 A、地理 B、地理 A から 1 科目以上を履修することとされている。

(12) 教学社のみ 2 種類の社会 2 教科書を同時に発行しているため、ファン・チェキ他 10 名による教科書を「教学社版 a」、チャ・キョンス他 11 名による教科書を「教学社版 b」と表記する。

(13) 章、節、項目のタイトルなどには「　」を付して示した。なお、各教科書の発行年は、⑪が 2005 年、③・⑧・⑫・⑬が 2003 年、他は 2002 年である。

(14) ちなみに、日本の中学校歴史教科書、高等学校世界史 B 教科書でベトナム戦争に触れないものはない。

(15) 韓国教育人的資源部・国史編纂委員会・国定図書編纂委員会編『高等学校国史』教学社、2005（韓国語)。

(16) 韓国教育人的資源部・国史編纂委員会・国定図書編纂委員会編（三橋広夫訳）『韓国の歴史教科書－中学校国定国史』明石書店、2005(原著 2005)、313 頁。

(17) (1) 朴根好『韓国の経済発展とベトナム戦争』御茶の水書房、1993。(2) 木宮正史「1960 年代韓国の冷戦と経済開発－日韓国交正常化と韓国軍のベトナム派兵を中心として」法学志林 92-4、1995、1-116 頁。

(18) (1) 具秀姃（金成蘭訳）「ベトナムの韓国軍」

Quadrante4、2002、33-39 頁、(2) 韓洪九（高崎宗司訳）『韓洪九の韓国現代史Ⅱ』平凡社、2005（原著 2003）、32-64 頁。なお、李承晩政権下の 1954 年にすでにラオスへの派兵案が韓国からアメリカに伝えられていたことも知られている。李鍾元『東アジア冷戦と韓米日関係』東京大学出版会、1996、94-98 頁。

(19) 前掲 (17) (2) 104 頁。

(20) 前掲 (18) (2) 52 頁。

(21) 韓国教育部・韓国教育開発院編『中学校社会 2』大韓教科書、1996、160 頁（韓国語）。

(22) 韓国教育部・国史編纂委員会・一種図書開発委員会編（石渡延男・三橋広夫訳）『入門　韓国の歴史－国定韓国中学校国史教科書』明石書店、1998（原著 1997）、382 頁。

(23) 韓国教育部・国史編纂委員会・一種図書開発委員会編（大槻健・君島和彦・申 奎燮訳）『新版韓国の歴史第二版－国定韓国高等学校歴史教科書』明石書店、2003（原著 1996）、474 頁。

(24) 金栄鎬「韓国のベトナム戦争の『記憶』－加害の忘却・想起の変容とナショナリズム」広島国際研究 11、2005、1-30 頁。

(25) 前掲 (18) (1)、また前掲 (24)。

(26) 前掲 (9)、および前掲 (7) (1)。

(27) 韓国の世界史教科書ではベルリン封鎖、キューバ危機と 6.25 戦争が冷戦の説明で頻出する。日本の中学校歴史教科書でも同様にベルリン封鎖と朝鮮戦争が大きく扱われ、ベトナム戦争は問題が複雑だからか、別項になっている。

(28) 佐藤次高・木村靖二・岸本美緒ほか『詳説世界史』山川出版社、2003、336-337 頁。なおこの山川出版版教科書は世界史Ｂで圧倒的なシェアを有する。

(29) 渡部恵子「日本から見たベトナム戦争とその戦後」（中野亜里編『ベトナム戦争の「戦後」』めこん、2005）241-267 頁。

(30)「『英語になっていない』英語教科書」東亜日報（日本語 web 版）2006 年 5 月 6 日付、http://japanese.donga.com/srv/service.php3?biid=2006050622578、2006 年 10 月 31 日検索。

(31) ベトナム戦争の記録編集委員会編『ベトナム戦争の記録』大月書店、1988、175 頁。